

* 新しい年度が始まりました。希望に満ちた若者が、職場に、学校に、あふれていることでしょう。前回（2012年11月号編集室）に引き続き、国際化について記してみます。

* 若者の内向き化が指摘されますが、私の周りを見渡すと、決してそんなことはないと感じます。私も関係している国際学生技術研修協会（イアエステ、<http://www.iaeste.or.jp/>）は、理系学生が外国の企業や大学、研究所で科学技術インターンシップを行うことを手助けする、ユネスコ等の協力を受けている団体です。80か国以上が加盟しています。日本では全国の主要大学の教員がボランティアで運営しています。英国ではブリティッシュカウンシルが、ドイツではドイツ学術交流会（DAAD）が運営にあたっています。日本からも毎年、多くの若者がこの国際インターンシップにチャレンジしています。逆に海外からの学生を国内で引き受けて頂いている企業や大学、研究所も多数あります。

* イアエステで国際インターンシップ研修に行く学生の中心は、修士学生や学部後期生です。その多くは夏休みも利用して2~3か月の日程を組みます。電気・電子、情報、機械といった大枠で研修先との一人一人のマッチングが行われます。研修は英語で行いますが、語学研修ではありません。インターンシップの意義は、理系の仕事を責任を持って遂行して給与を得、視野を広げ、人々と交流し、現地での生活を苦労しながら自分で切り開くことにより、人間としての能力と自信を身に付けて、粘り強く寛容な人物になってもらうことです。私の知る多くのイアエステ経験学生が、実際に大きく成長しています。それとは全く別のものに、修学旅行のように団体で何らかの研修に行く企画もあるようですが、それでは意味がないと感じます。私の同僚の言葉を借りれば、「海外に出よ。休みを取って旅せよ。絶対に二人以上で行くな。一人で行かなければ、大金をどぶに捨てるようなものだ。」

* 上記のような、若者が積極的に行動できる様々な機会を準備し、選択肢を広げることが肝要だと、私は考えます。若者が内向きに見える理由は、親や社会にあるのではないかとも思います。不況の影響もあり、大学生になっても親元か

ら離れない学生が増えているとも報じられています。せっかくの自立のチャンスを逃しています。また一部の大学では「秋入学」やそれに関連した「ギャップターム」の設置なども議論に上っているようです。しかしそれらを大学全体で強制するのでは、2000年代に初等中等教育で大混乱をもたらした「ゆとり教育」の大学版を二の舞として演ずることになってしまいます。むしろ学生には講義をしっかりと行いつつ国際インターンシップにも休学などしなくても取り組める、そんな状況を作ることが大学を含む社会の責務であると考えます。体系的な勉学という本務を全うする環境を整えた上で、自由度を高め多様性を確保する、これが必要です。この点でクォーター制も望ましいでしょう。海外からの留学生が既に非常に多い工学系の学部・大学院で、教員は日々、多様性の重要性を感じています。これも別の同僚の言葉を借りれば、「教育・研究は会議室で行われているのではない、現場が行っているのだ。」

* 海外からイアエステで日本に来る学生も粒ぞろいで、引き受けた部署も楽しい国際交流を体験します。例えば、東京に来る研修生の多くが次の感想を持ちます。「東京の宿舎はものすごく狭くて、窓外がすぐに隣のビルで、それでいて7万円/月もかかっているらしい（研修先から支払われているからよいが）。それに通勤時間が30分以上もかかり、それが満員の電車で人と人が体が接触するほど混んでいる、信じられない、やっつけられない、こんな研修は許されない！」そこから議論が始まり、相互理解が始まります。こんな日常に新しい発見があり、考えが飛躍します。

* 会誌でも、多様性を高め自由度を増やすことが、会員満足にとって重要であると思います。現在、会誌内の国際化の窓である“IEICE Global Plaza”は、国際委員会下に設置されたタスクフォースメンバーの尽力により精力的に編集されています。より多くの日本滞在中の海外研究者に議論に加わってもらったり、会誌編集委員会と相互交流したりすることによりコンテンツのバラエティを増やし、一層海外メンバーの需要に応え、更には需要の掘り起こしも進められるのではないかと想像します。今後の展開が楽しみです。

（編集特別幹事 廣瀬 明）